



新たな海外展開を考える富山県企業

ジェトロ富山 所長 温井 邦彦

厳しい経済環境の中、富山県企業において次につながる動きが進展している。

今さらながらであるが、周囲のグローバル化に驚いたのは、7月に開催した貿易実務講座になんと80名以上の申し込みがあったこと。会場の都合で定員以上の方にはお断りせざるをえなかったが、昨年の受講者と比べると、2倍以上の方に受講していただいたことになる。県内の企業を訪問し、お話を聞かせていただくとこの数字にも納得がいく。

例えば、富山市のある工場では、組み立て中の機械は9割が海外、主に中国向けであったり、高岡市の機械メーカーでは、日本国内の工場に納めたはずの機械が予期せず上海工場に設置されていたり、富山市の企業では、大手メーカーに納めている制御盤が海外工場向け機械に付属するため必然的に海外向けとなっていたり、また、原材料はというと韓国からの調達であったり、海外現地法人からの輸入であったり。このように県内の工場の現場は海外との貿易業務が日常になっていることがうかがえる。

ジェトロで相談を受ける海外進出の案件がまた増えてきているが、最近の特徴は、海外は初めてだが、「部品供給のための拠点設立とは限らない」ことである。進出の地域的には中国はもちろんであるがアセアン諸国への関心も高まっている。富山市の運送業の企業は、中国で食品を中心とした冷蔵輸送会社を新たに設立した。事業は緒についた所であるが、自社で冷蔵車をそろえ、日本流のきめ細やかなサービスで事業拡大を図ろうとしている。特殊な分野だけにローカルの中国人業者の参入はこれから、それまでに経営基盤を整えたいと目論んでいる。滑川市の設備会社は富裕層をターゲットにした内装工事の会社を中国内陸部で準備中である。日本での仕事量が漸減しており、将来性を見越し、パイオニアとして進出先を敢えて内陸に決めた。富山県金型協同組合は中国、タイでなく新興のなかの新興であるインドネシアへ進

出予定である。日本での厳しい現状から、新規市場を開拓する必要があるためである。ベトナムの投資環境に関する情報照会も増えている。機械部品を製造する富山市の企業は、海外はまだ進出していないが、将来的には日本だけでは立ち回れないとベトナムへの進出を考えている。また、事業の柱はこれから考える、ともかく出ることが先と橋頭堡をベトナムに築いた県内企業もある。これら企業にとって、富山に本社を維持し、軸足を日本において海外展開を図るというところが、現地での会社の信用力を築く上で、重要なポイントだ。

県内企業は中国需要に沸いているが、中でも人件費の高騰を受け、中国のローカル企業からの工場内の自動化機械や省力化装置の受注が急増している。富山市の包装機械メーカーはやっとここ2、3年で商売になってきたという。顧客は日系企業でなく、ほとんどローカル企業という。タイ、インドネシアでもローカル企業に売上を伸ばしている。ローカル企業の需要が旺盛になってきている点が注目すべきところだ。

高岡の銅器業界も新商品が続々と発表され、海外での展示会出展に意欲的だ。5月に、初めてニューヨークのインテリア見本市に出展した銅板加工のノウハウを持つ高岡市の仏具メーカーは、ホテルの内装材料としての引き合いで大きな手ごたえを感じた。アルミの鑄造技術を生かして、本業の金属部品加工の売上の将来の補填となることも考え、新たにギフト分野に進出した高岡市の企業もある。また、ジャパンプランド事業を活用した新商品開発の研究会も立ち上がった。

海外展開を考える富山県企業にとって、悩みの種は海外要員の不足とのこと。富山から東京への転勤でさえも適任者を探すのに四苦八苦するのに、まして海外となると行ってくれる人を探すのが難しいと異口同音に仰っていた。今後の海外展開のためには海外人材の育成が急務のようである。

以上